令和８年度第１回三条市教育事務点検評価委員会　会議概要

１　日　　時　　令和８年７月２日（木）　午後３時開会、午後４時 55 分閉会

２　場　　所　　三条市役所栄庁舎　３階　中会議室

３　出 席 者　　雲尾委員長、阿部委員、佐藤委員（３人）

４　職 員 等　　熊倉教育長、平岡教育部長、小林教育総務課長、小林子育て支援課長、相田学校教育課長、樋口教育センター長、佐藤教育総務課課長補佐、井上教育総務課庶務係長、富樫教育総務課庶務係主任（９人）

５　傍 聴 人　　なし

６　議　　題

(1) 教育に関する事務の点検及び評価について

(2) 令和７年度教育に関する事務の事後評価シートについて

(3) 次回の委員会の日程について

７　審議の経過及び結果

(1) 教育に関する事務の点検及び評価について

（雲尾委員長）

教育に関する事務の点検及び評価について、事務局は説明願いたい。

（小林教育総務課長）

～資料のとおり

（雲尾委員長）

質問等を発言願いたい。

～特になし

(2) 令和７年度教育に関する事務の事後評価シートについて

（雲尾委員長）

令和７年度教育に関する事務の事後評価シートについて、事務局は説明願いたい。

（小林教育総務課長）

～資料のとおり

（雲尾委員長）

始めに、事後評価シートの１から３ページについて、事務局は説明願いたい。

（樋口教育センター長、小林教育総務課長、相田学校教育課長）

～資料のとおり

(雲尾委員長)

事後評価シートの１から３ページについて質問等を発言願いたい。まずは１ページについてどうか。

(佐藤委員)

基本方針の、「三条市授業スタンダードの浸透や小中一貫教育カリキュラムの自校化、自学園化」は、スタンダード（標準化）と、自校化、自学園化とで相反する取組のように見えるが、それぞれどういう取組なのか。

(樋口教育センター長)

三条市授業スタンダードは、三条市で作成している標準的な授業の進め方モデルである。必ず沿うというものではないが、これに沿って学習を展開すると、子どもたちの興味や関心を生かし、主体的・対話的な学習ができるというものである。

小中一貫教育カリキュラムの自校化、自学園化は、それぞれの学校で子どもたちや地域の実態等があるため、それに合わせたカリキュラムを作成し、より子どもたちが主体的に学習できるよう取り組んでいるものである。

(佐藤委員)

今回、成果指標が達成できなかったということだが、過去３年間も同じような成果である。指導方法等で反省点はあるのか、また授業スタンダード等に生かす取組はあるのか。

(樋口教育センター長)

この結果を受けて、毎年の研修の在り方、授業スタンダードを見直ししている。研修については、今まで活動や学習のまとめを重視してきたが、令和７年度からは教職員の悩み、授業の在り方など、ニーズに合わせた研修に変更しており、今後も見直しを進めていく。

(阿部委員)

授業スタンダードの達成率はどのくらいか、また、Step１研修を長期寄り添い型に変更したということだが、具体的にどのような研修を行っているのか。

(樋口教育センター長)

授業スタンダード達成率の具体的な数字は持っていないが、問題意識は持っている。今後、さらに授業スタンダードを教職員に浸透させるために、研修の充実や授業の見直しを進める必要があると考えている。

Step１研修は、教職員の主な悩みとして、子どもたちとの関わり方、学級経営、

学習指導があげられるため、これに寄り添った研修を行っている。
(阿部委員)
　授業スタンダードの導入から随分経過しているが、成果指標の実績値は令和４年度から毎年下がっている。極端に言えば、授業スタンダードを廃止してもよいのではないか。
(樋口教育センター長)
　子どもたちの興味、関心を生かし、それを学習問題に変えて、問題解決的な学習をすることによって、文部科学省が求めている主体的・対話的な学習につなげていくことができると考えており、授業スタンダードは継続したい。
　ただし、結果が伴わないところがあるため、どのような形で教職員に浸透できるのか、また、それ以外で足りないところがある可能性も検討したいと考えている。
(阿部委員)
　どちらかというと授業スタンダードに賛成だが、教職員の半数が若手になっている中で、若手の方が授業スタンダードを分からない状況である。若手に授業スタンダードを浸透させ、子どもの学力につながるよう、教育委員会は研修を充実させ、指導してもらいたい。
　最後に、今年度の NRT の結果、小学生の国語、中学生の理科・英語が低かったことが課題とあるが、今後の対策はあるのか。
(樋口教育センター長)
　書く問題で子どもたちがつまずいているが、書くことだけが苦手ということではなく、学ぶ意欲、難しいことにチャレンジする意欲に課題があると考えている。教職員が子どもたちに、学習することは楽しい、難しいことを考えることは楽しいと思わせる授業をする必要があり、それができるようになる研修を実施したい。
(雲尾委員長)
　成果指標と目標値を差し替えるとのことだがどういうことか。
(樋口教育センター長)
　NRT を成果指標にすることは変わらないが、評価方法を差し替える予定である。
(雲尾委員長)
　主な取組の、「好事例の共有」の好事例とは何を指すのか。
(樋口教育センター長)
　学習支援ソフトの使い方など、授業で活用するときの好事例である。
(雲尾委員長)

今後の方向性の、「活用好事例を共有」は、同じことを差すのか。

(樋口教育センター長)

そのとおりである。

(雲尾委員長)

読み取りにくいため修正を願いたい。また、全ページに共通するが、成果指標と目標値の数字の並びが分かりにくい。縦に並べたほうが、目標値がどう変化しているか、それに対して実績値がどうかが上下ですぐ見れてよいと思う。

(樋口教育センター長)

修正する。

(雲尾委員長)

次に、２ページについて質問等を発言願いたい。

(阿部委員)

評価の、「評価アンケートの表現が、子どもたちが地域の方々と行ってきた活動と、直接的に結び付かなかった」は、アンケートの文言が子どもたちによく理解してもらえなかったために数字がうまく出てこなかった、という読み取りでよいのか。

(樋口教育センター長)

そのとおりである。実際は活動をしているものの、アンケートの表現により子どもたちの受け止めに影響を与えたのではないかという文章である。アンケート項目は変えず、追加項目をつけて、子どもたちに想起させやすいアンケートに修正する予定である。

(雲尾委員長)

先日、小中一貫教育推進委員会でこのアンケート方法を変えることとしたが、評価アンケートの文章が、子どもたちと地域の方とで行ってきた活動を想起させにくいものとなっていたため、活動の具体例を追加するということであった。

(阿部委員)

実際は活動をしているということだが、学校や教育委員会は、どのぐらい手応えを感じているのか。

(樋口教育センター長)

どの学校も充実した活動を行っているが、目標値にはなかなか届かないと感じている。

(雲尾委員長)

次に、３ページについて質問等を発言願いたい。

(阿部委員)

部活動の地域展開で、教職員の負担は軽減されるのか。

(相田学校教育課長)

令和７年度までに、段階的に種目ごとに休日の部活動をなくして、地域クラブ活動に変えてきたため、教職員が休日の部活動に費やす時間はかなり減った。令和８年度の夏以降、休日の部活動は完全になくなり、教職員が休日の部活動に費やす時間は基本的になくなるため、負担は軽減されると考えている。

(阿部委員)

今後、平日も部活動の地域展開をするとのことだが、教職員が部活動指導しているところに地域の方が入ってくるのか、それとも教職員ではなく、地域の方が指導するのか。

(相田学校教育課長)

現在、令和 14 年度以降を目指して平日の部活動の地域展開を進め、最終的には部活動をなくし、地域クラブ化することを考えている。

(佐藤委員)

地域クラブ活動に移行するタイミングで、子どもたちが部活動を辞めることもあると思う。部活動は、心身ともに健康に過ごすなどの意義があると考えるが、部活動をしない子どもたちに対して、どのように考えているのか。

(相田学校教育課長)

中学生で部活動に所属していない生徒は、令和８年度で１割を超えている。これは、習い事や放課後はゆっくり過ごしたい子どもたちである。今後、部活動が地域クラブになることで、辞めるという選択をする子どもたちもいると思う。平日の部活動がなくなったとき、放課後の過ごし方について校長と相談しながら検討していかなければならない考えている。

(雲尾委員長)

続いて、事後評価シートの４から５ページについて、事務局は説明願いたい。

(相田学校教育課長)

～資料のとおり

(雲尾委員長)

事後評価シートの４、５ページについて質問等を発言願いたい。まずは４ページについてどうか。

（阿部委員）

評価で、「予想以上に通級利用者の増加があり、目標値には届かなかった」とあるが、通級利用者は何人だったのか。また、当初の見込みは何人だったのか。

（相田学校教育課長）

通級利用者は約200人である。当初は、120人から130人を見込んでいたが、年度途中で増えていった。

（阿部委員）

特別支援サポーターの定数は73人とあるが、何か基準があるのか。

（相田学校教育課長）

令和４年度に特別支援サポーターを子ども何人に対して１人つけるかという調査を実施しており、それを踏まえて算出している。

（阿部委員）

学校のニーズはもっと多いのか。

（相田学校教育課長）

そのとおりである。

（佐藤委員）

通級指導教室を新設したということだが、目標値と実績値が年々乖離している。今年も見込みに対して通級指導教室を新設するのか。また、予想以上に利用者の増加があったということだが、今後どのように対応するのか。

（相田学校教育課長）

当初、令和８年度は１教室を増設する予定であったが、２教室を増設した。これにより、令和８年度は目標値に届くものと考えている。

（雲尾委員長）

今後、利用者が増えなければ、目標値に届くということか。

（相田学校教育課長）

多少の利用者が増えても目標値に届く。

（雲尾委員長）

今後の方向性で、「インクルーシブ教育システムの推進により、通級指導教室の利用者の増加が見込まれるため」とあるが、そもそもインクルーシブ教育システムを推進するのか、また、インクルーシブ教育システムを推進することによって利用者の増加が見込まれるのか、インクルーシブ教育システムの推進に関係なく、インクルーシブ教育への理解の拡大や通級指導教室の認知の広がりによって増えるの

か。
(相田学校教育課長)
この文章は、これまで特別支援学級にいた子どもたちが、インクルーシブ教育によって通常学級の中でも通級指導教室を利用しながら学校生活を送ることができるようになることの推進により、通級指導教室の利用者が増えるという意味である。しかし、御意見のとおりインクルーシブ教育への理解の拡大や、通級指導教室の認知の広がりという面もあるため追記する。
(雲尾委員長)
次に、５ページについて質問等を発言願いたい。
(阿部委員)
今後の方向性で、WEBQU に代わり新たなアンケートを導入しているということだが、理由は何か。
(相田学校教育課長)
一番の理由は回数である。年２回から月１回とし、子どもたちの心の変化をより見取れるようにした。
(阿部委員)
新しいアンケートや毎日の健康観察は、学校でどのように活用するのか。
(相田学校教育課長)
子どもたちがタブレットで回答したものが一覧となり、学校で見ることができる。困っている、辛いという回答をした子どもは赤い色で表示され、一目で分かるようになっており、学校はそれを見て子どもたちに声かけをしていくこと、まずはこのような使い方をお願いしている。現在、学級全体の状況をグラフ化する準備を進めており、その後、使い方の研修を実施したいと考えている。
(阿部委員)
成果指標を令和８年度から変更し、目標値を 86.0％とした理由は何か。
(相田学校教育課長)
WEBQU と今回の新しい学校生活アンケートの質問項目とは、重なる部分が多いため、WEBQU で子どもたちがどれぐらい肯定的な回答をしていたかということを検証し目標値を定めた。
(佐藤委員)
成果指標が令和５年から７年で少しずつ満足群の割合が減っているが、分析等しているのか。

（相田学校教育課長）

学級の他の子どもたちとうまく関われていないという状況が数字に表れている。令和５年度から大きく変わったことは、新型コロナウイルス感染症による子ども同士の接触の制限を解いたことである。３、４年間、人と接する機会を多く持てなかった子どもたちが、どう人と接したらよいのか分からず、関係がうまく築けないという状況があったことは一つの要因であると捉えている。

（佐藤委員）

全国的にそのような傾向があるのか。

（相田学校教育課長）

WEBQU の各市町村の数字は把握していないが、令和５年度以降、不登校の数は全国的に急激な増加をしている。これについては、三条市も同様であり、全国的にも三条市と同じような傾向があったのではないかと考えている。

（佐藤委員）

主な取組で、「「ゲーム依存」に関する保護者向け講演会を実施した」とあるが、ゲーム依存はいじめ、不登校につながりやすいのか。

（相田学校教育課長）

そのとおりである。

（佐藤委員）

学力、不登校対策を考えると、ゲームや SNS を長く使わない働きかけがあるとよい。

（雲尾委員長）

続いて、事後評価シートの６から８ページについて、事務局は説明願いたい。

（相田学校教育課長、小林教育総務課長）

～資料のとおり

（雲尾委員長）

事後評価シートの６から８ページについて質問等を発言願いたい。まずは６ページについてどうか。

（佐藤委員）

長時間労働をせざるを得ない職員に対して、個別アプローチをしているのか。

（相田学校教育課長）

教育委員会が個別アプローチをすることはないが、校長を通じて産業医と面談をしている。また、超過勤務が一月 80 時間を超える教職員は、必ず管理職が面談を行い、その結果を教育委員会に報告してもらっている。

（佐藤委員）

超過勤務を減らすために、何をしているのか。評価シートに記載があるように、人を増やしているのか。

（相田学校教育課長）

人を増やすことが全てではないが、ある程度、人を増やすことで教職員の負担が軽減すると考えている。

（熊倉教育長）

昨年まで学校で勤務していたが、人を増員してもらい助かった。例えば、学級担任が放課後行っていた授業で使う印刷物を依頼できるようになった、また、不登校の子どもが別室登校しているとき、学級担任が教室と別室を行き来していたが、別室にスタッフを常駐させることができた。

（雲尾委員長）

今後の方向性で、「児童生徒に向き合える環境の形成を推進」とあるが、どう検証していくかが問われると思う。また、「行事の精選」とあるが、行事の精選が過ぎることで、むしろ子どもに向き合う時間が減る現状もある。実際、地域の方が関わる行事などが多忙解消の名の下に減らされていき、例えば、運動会は半日開催の学校の方が多数派になっている。本当に子どもに向き合う時間を確保しているのかという問題がある。

また、多様なスタッフや地域人材の活用以外の、教育委員会としてやるべき、閉庁日の徹底、時間外対応などはどのような状況か。

（相田学校教育課長）

閉庁日は、年間５日以上を必ず設定するよう指示している。時間外対応は、留守番電話を全ての学校に設置し、小学校は夕方５時半から翌朝７時 45 分までを留守番電話に設定し、緊急の場合は教育委員会に電話、そうでなければ、翌日７時 45 分以降に学校に電話をしてもらっている。

（雲尾委員長）

閉庁日が５日以上は少ないのではないか。年末年始だけでも６日くらいある。

（相田学校教育課長）

既に休日である年末年始等は除いた、平日５日以上である。多い学校は 13 日位設定している。

（雲尾委員長）

増員は閉庁日の少ない学校に多くすること、留守番電話の設定を早めることもで

きそうである。

欠席の連絡は電話ではなく、メールでも可能か。

（相田学校教育課長）

アプリで行うことができる。

（雲尾委員長）

人の増員だけではなく、そういったことを記載してもよいと思う。

（相田学校教育課長）

修正させていただく。

（雲尾委員長）

次に、７ページについて質問等を発言願いたい。

（雲尾委員長）

今後の方向性で、「延べ 12 校」はどのように数えるのか。

（小林教育総務課長）

確認し、必要であれば修正する。

（雲尾委員長）

次に、８ページについて質問等を発言願いたい。

（佐藤委員）

目標値で、「対応員が学校からの問合せに対応した割合」の目標値が 100％だが、対応しない場合があるのか、必ず対応するべきことであり、目標とすること自体どうなのか。

（小林教育総務課長）

主な取組で、「情報機器のトラブルに即応できる体制の構築」とあり、即応できれば 100％、トラブルの件数が多く対応員で即応し切れない場合、外部の事業者に依頼しないと対応できない場合は、100％に到達できないことになる。乖離が大きくなるときは、支援員の増員も想定されると思うが、ひとまずは即応し切れることを目標とした。

（阿部委員）

ICT 機器対応員は、不調やトラブルへの対応をするだけか。

（小林教育総務課長）

トラブル対応だけには限らないが、この施策の成果指標としてトラブル対応をあげたもの。

（阿部委員）

例えば、学校現場からこういう教材を作りたいという要望の対応もするのか。
（樋口教育センター長）
そのような要望は、教育センターの ICT 支援員が各校を巡回し対応している。
（雲尾委員長）
続いて、事後評価シートの９から 11 ページについて、事務局は説明願いたい。
（小林子育て支援課長）
～資料のとおり
（雲尾委員長）
事後評価シートの９から 11 ページについて質問等を発言願いたい。まずは９ページについてどうか。
（雲尾委員長）
今後の方向性の、「保育者の現状や課題に応じて研修を継続実施し、保育の質のさらなる向上を図る」は、どういう意味か。
（小林子育て支援課長）
保育者の現状や課題に応じた研修会を継続的に実施するということであるが、分かりやすい文章となるように修正する。
（雲尾委員長）
次に、10 ページについて質問等を発言願いたい。
（阿部委員）
今後の方向性の、「保育や授業の参観成果を日々の指導に反映させる」は教育委員会が幼児施設に反映させるよう働きかけるという意味か。
（小林子育て支援課長）
小学校１年生、年長児の現場で反映させるという意味であるが、分かりやすい文章となるように修正する。
（佐藤委員）
施策の基本方針で、「子どもたちの環境変化をより滑らかなものとしていくとともに、幼稚園・保育所（園）等での「遊びを通した学びの環境」から、小学校での「学習による学びの環境」へと、スムーズな接続を図る」とあるが、滑らかなものとしていくことと、スムーズな接続を図るということは何が違うのか。
（平岡教育部長）
前段は、今まで保育所の環境にいた子どもたちが小学校に入る環境変化そのものを大きく捉えており、友達構成が変わり、クラスが構成されるという環境変化に対

して戸惑いを感じて、小１プロブレム等生じることもあるため、しっかり滑らかなものになるように留意するという意味である。後段は、その中でも特に遊びから学習に変わり、取り組むことが大きく転換するため、これをスムーズにさせていくという意味である。

（雲尾委員長）

評価の、「同一傾向を示すようになった」の同一傾向とは何を指すのか。

（小林子育て支援課長）

様々な自己評価を行っているが、当時は保育士と教職員の中で、子どもの学びが変わるというところの遊びと学習の意識のズレが非常に大きかった。その後、交流活動が進み、同一傾向を示すようになったということであるが、わかりにくい表現であるため修正する。

（雲尾委員長）

次に、11 ページについて質問等を発言願いたい。

（阿部委員）

主な取組の、「地域コミュニティ祭り等行事への参加」は、教育委員会が行ったのか。また、「子どもの成長に合わせた保護者が学ぶ家庭教育講座の実施」は、子どもの成長に合わせた保護者という読み取りになるため修正願いたい。更に、今後の方向性は、全体的に主語や対象者が読み取れないので修正願いたい。

（小林子育て支援課長）

修正させていただく。

（雲尾委員長）

主な取組の、「子育て支援センターの広場開放、園庭開放」は教育委員会と各園が行ったのか。

（小林子育て支援課長）

子育て支援センターの広場は保育所に併設されており、基本的には保育施設が行っている。読みやすいように修正する。

(3) 次回の委員会の日程について

小林教育総務課長から提案があり、次のとおり決定

〔日時〕令和８年７月 23 日（木）午前 10 時から